Jugend Philharmoniker

Special Concert

RossiniBeethovenMendelssohn

2023.9.16

Kanagawa Prefectural Music Hall

jugend
philharmoniker

ごあいさつ

本日はユーゲント・フィルハーモニカー第4回特別演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。「東洋一の響き」とも称されたこの素晴らしいホールで皆様に音楽をお届けできることを心より嬉しく思っております。

「協奏曲」を意味する“concerto”という単語はラテン語の「論争する」という動詞が語源になっているそうです。「論争」というと取るに足らない口喧嘩をイメージしてしまいがちですが、ここでいう「論争」は独奏楽器とオーケストラとが「対話」を重ね、互いを高め合っていく、といったイメージでしょうか。ある落語家の方が「交響曲を“落語”だとするならば、協奏曲は“漫才”である」と例えていたのを印象深く覚えています。

ユーゲントフィルではこれまでに当楽団を卒業後、プロとして活躍されている音楽家の方々や楽団員と親交の深い音楽家の方々との共演（＝対話）を通して成長を重ねてまいりました。今回の演奏会では音楽監督の安斎拓志と学生時代から親交の深い、ヴァイオリニストの佐久間聡一さんをお迎えし、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏します。この曲は他の作曲家の協奏曲で見られるような「技巧的なソロとその伴奏に徹するオーケストラ」という構図ではなく、「ソリストとオーケストラの“対話”」を随所で感じていただけるのではないかと思います。佐久間さんは大阪フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団といった名だたるプロオーケストラで首席奏者を務めた輝かしい経歴をお持ちです。今回は協奏曲以外の曲目も弦楽器セクションの練習をご指導いただいたほか、合奏でも数多くのアドバイスをいただきました。本日の演奏会メイン曲、メンデルスゾーンの交響曲第3番ではトップサイド（コンサートマスターの隣）で演奏いただき、オーケストラをリードいただきます。佐久間さんとユーゲントフィルの「対話」、漫才のような「掛け合い」から生まれる化学反応をぜひお楽しみいただけましたら幸いです。

最後になりましたが、佐久間さんをはじめ、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました皆様、そしてご来場いただきました皆様に、心からの御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対して引き続きのご期待と変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表
三宅雅也

ユーゲント・フィルハーモニカー

第4回特別演奏会

2023年 9月16日（土）　12:45 開場／ 13:30 開演

神奈川県立音楽堂

プログラム

G. ロッシーニ：歌劇《ウィリアム・テル》序曲

ROSSINI: Ouverture de Guillaume Tell

L.v.ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.61

BEETHOVEN: Violin Concerto in D Major, Op.61

F. メンデルスゾーン：交響曲第3番 イ短調《スコットランド》Op.56

MENDELSSOHN: Symphony No.3 in A Minor, Op.56 “Scottish”

ヴァイオリン独奏＝佐久間聡一

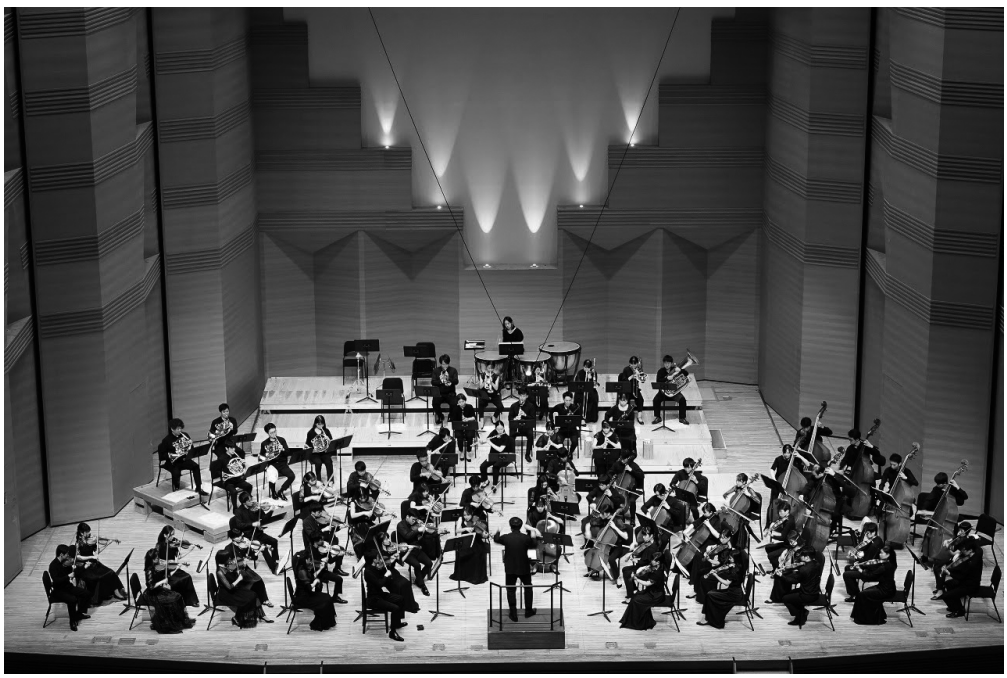
指揮＝安斎拓志

指揮　安斎拓志

福島県出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島高校管弦楽団でヴァイオリンを担当し、これまでにNHK交響楽団の木全利行、篠崎史紀の両氏らに師事。全日本高等学校選抜オーケストラのオーストリア公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団においてコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の薦めで指揮を始める。卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学ぶ。これまでに指揮を故佐藤功太郎、故湯浅勇治、河地良智の各氏らに師事、これまでに数多くの演奏会の副指揮者・客演指揮者を務める。2006年にユーゲント・フィルハーモニカーを創設、農村でのオーケストラ演奏会を指揮するなど意欲的に活動し、それらの音楽活動が読売新聞全国版に度々取り上げられる。2012・2013年には国立競技場においてアイドルグループ嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。現在ユーゲント・フィルハーモニカー音楽監督。2017年からは全日本高等学校オーケストラ連盟の高校オーケストラ支援事業を担当、数多くの音楽事業をオーガナイズし青少年の音楽教育にも力を入れている。

独奏　佐久間聡一

山形県出身。4才よりヴァイオリンを始め桐朋学園大学へ進む。10代から演奏活動を始め、ソロ・室内楽はもとより、全日本高等学校選抜オーケストラや桐朋学園オーケストラにて早くからコンサートマスターとして活躍する。桐朋学園在学中より新日本フィルハーモニー交響楽団の契約団員を務め、その後、大阪フィルハーモニー交響楽団の首席奏者となる。2012年3月、大阪フィル退団後にドイツへ渡る。ハノーファーにてUlf Schneider教授の下で研鑽を積むほか、ドイツ・カンマーフィルハーモニー・ブレーメンに客演。帰国後は広島交響楽団の第1コンサートマスターを務めた。現在はソリスト、室内楽奏者として活動しており昴21弦楽四重奏団、ピアノトリオMIYABI、石田組のメンバー。弦楽トリオAXISのメンバーとして福井ハーモニーホール、レジデントアーティストを務めており「その魅力的な音色で聴衆を一つにする力がある」（音楽の友）など誌上でも注目を浴びている。CD録音も数多く、好評販売中。近年はYouTubeチャンネル『佐久間聡一のヴァイオリン酒場 サロンフリッツ』においてヴァイオリンの演奏法や巨匠モノマネを公開中。



ユーゲント・フィルハーモニカー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≒プロオケには出来ないこと）」を追求している。

曲紹介

G.ロッシーニ (1792–1868)：歌劇《ウィリアム・テル》序曲

歌劇《ウィリアム・テル》はロッシーニが37歳で書いた、最後のオペラ作品である。パリ・オペラ座との契約により作曲された。彼は本作を書いた後、76歳で亡くなるまで、ほぼ作曲活動を絶った。およそ5ヶ月間で書き上げられ、これは速筆のロッシーニとしてはかなりの期間を要した方である。中世スイスの伝説的英雄ウィリアム・テルと、13世紀のスイス同盟の史実に基づいて、ドイツの文豪シラーが書き上げた戯曲が台本の下敷きとなっている。

筋書きは次の通りである。かつてスイスは神聖ローマ帝国の下、貴族達に分割統治され、民衆はその下で圧政に苦しんでいたが、テルの活躍や民衆の蜂起の末、人々は自由を取り戻す。異国情緒、歴史的背景、合唱やバレエを伴う規模の大きさなど、ロッシーニのオペラ作曲の総決算とも言える内容になっている。

序曲は、「夜明け」「嵐」「静けさ」「スイス軍隊の行進曲」の4つの部分に分かれており、オペラの筋書きを表すかのような内容になっている。

「夜明け」は、チェロ独奏、ついでチェロ五重奏で開始される。極めて緊張感があり、これから始める激動の展開を予期させる。

「嵐」ではテンポが上がり、弦楽器の風の描写の後、全楽器で暴風雨が表現される。

「静けさ」では、フルートとイングリッシュ・ホルンの二重奏が展開され、牧歌的な情緒を漂わせる。

「スイス軍隊の行進曲」では、トランペットのファンファーレに始まり、景気の良い行進曲が全楽器によって演奏される。ファンファーレ主題は巧みに変奏され、豪華絢爛なクライマックスを迎えたところで曲が終わる。

L.v.ベートーヴェン (1770–1827)：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.61

本作は1806年に作曲された。ベートーヴェンは作曲の仕上げを初演の間際まで行う事が常で、初演の独奏者であるクレメントは初見で弾く事を余儀なくされたという。

現在でこそ抜きん出た傑作と評価される本作だが、初演から40年近くは、再演される機会は多くなかった。初演当時の演奏評として、ウィーン劇場新聞には以下のように掲載された。

「この曲は多くの美しさはあるものの、前後のつながりがしばしば断ち切られているように見えたり、平凡な2〜3の箇所を永久に繰り返す事が、飽きさせる要因になっている」

交響曲第1番や2番、軽妙な室内楽曲の数々を望んでいた当時のウィーンの聴衆からすると、この協奏曲は先進的過ぎたようである。1844年、ブラームスとも親交の厚かったヨアヒム(1831-1907)が、メンデルスゾーンの指揮で本作を取り上げ、それが再評価されるきっかけとなった。

1楽章：Allegro ma non troppo

4分の4拍子。ティンパニの静かな連打で開始される。すぐに木管が第一主題、第二主題を順次提示する。その間もティンパニのリズムは別の楽器で奏され続ける。第一主題が全楽器で演奏された後、独奏ヴァイオリンが颯爽と登場し、第一主題を装飾を加えながら朗々と歌い上げる。

オーケストラのみの全合奏と、独奏ヴァイオリンの即興的フレーズが交錯しながら、カデンツァを迎える。カデンツァの後、独奏ヴァイオリンは第二主題をドルチェで開始し、最終的に全合奏で力強く終わる。

2楽章：Larghetto

4分の4拍子。変奏曲となる。安らいだ主題が、弱音器付きの弦楽器によって演奏される。

第一変奏はクラリネット、第二変奏はファゴット、第三変奏は全合奏により演奏される。独奏ヴァイオリンは装飾に徹する。

第三変奏が終わった後、「G線とD線で」という指示のもと、これまでと異なるメロディーを歌い出す。その後、華やかな変奏の部分があり、やがて静かに落ち着く。

3楽章：Rondo Allegro

8分の6拍子。冒頭から独奏ヴァイオリンがG線で、ロンドの主題を提示する。休止を置いた後、独奏ヴァイオリンを除く残り全ての全合奏で、この主題が更に繰り返される。その後、独奏ヴァイオリンが第二主題の一部を演奏し、細かく動き回った後、再びロンド主題が現れる。主題は変形され、その間に新たな旋律を導き出す。調性も様々に移り変わり、ひとしきり展開した後、ロンド主題がまた登場する。華やかな技巧を見せ続けた後、カデンツァに突入する。

カデンツァ終了後は、ロンド主題をもとにして輝かしいクライマックスを迎える。

F.メンデルスゾーン (1809–1847)：交響曲第3番 イ短調《スコットランド》Op.56

1829年、メンデルスゾーンが20才の時、彼は自作を指揮するためにイギリスへ赴いた。ロンドン滞在後、スコットランドへも足を伸ばし、観光の旅に出る。エディンバラの旧王城を訪れた際、その印象をこう語っている。

「メアリー女王が居住した宮殿へ足を運びました。階段をのぼった辺りの小さな部屋で、女王の寵臣であるリチオは殺害されたのです。その横にある礼拝堂は屋根がなく、緑で覆われています。その破壊された礼拝堂で、メアリーは女王として即位しました。辺りは朽ち果て、そして空から明るい日差しがのぞき込んでいます。そこで私は『スコットランド交響曲』の冒頭を思いついたのです」

この印象を元に翌1830年に作曲にとりかかったものの、指揮活動や楽団運営に追われたため、作曲は10年以上中断した。1842年1月に完成し、同年3月にライプツィヒ、6月にロンドンで演奏された。楽曲は英国のヴィクトリア女王に献呈された。

4つの楽章は切れ目なく演奏され、これは彼の代表作であるヴァイオリン協奏曲などにも共通して見られる特徴である。

1楽章：Andante con moto - Allegro un poco Agitato

ゆったりとした序奏部で始まる。4分の3拍子。オーボエ、クラリネット、ヴィオラによって、懐しくも哀しげな旋律が歌い出される。

序奏が終わると、主部に移る。8分の6拍子に変わり、流麗なメロディーはスコットランド舞曲を意識して作曲されたとも言われる。その後に別のメロディーがクラリネットで演奏されるが、この伴奏に最初のメロディーが用いられるという、変わった構成が見られる。管楽器を効果的に用いて華々しく展開され、一度嵐のような場面を提示した後、再び序奏がエンディングとして演奏される。

2楽章：Vivace non troppo

曲は1楽章から切れ目なく演奏される。4分の2拍子で、テンポの速い楽章である。

スコットランドの民謡風メロディーがクラリネットから始まり、他の楽器に引き継がれていく。弦楽器が演奏する別のメロディーは歯切れ良く登場し、この対象的な2つのメロディーで展開されていく。スコットランドの人々の陽気な生活を描写しているかのようである。

3楽章：Adagio

4分の2拍子。短い序奏の後、ホルンが信号音のようなリズムを打ち出す。ヴァイオリンが息の長い、しかし鬱々としたメロディーを演奏した後、冒頭のリズムを元にしたメロディーがクラリネット、ファゴット、ホルンにより演奏される。第1楽章の序奏部とどことなく似通った雰囲気があり、荒廃した古城の侘しさが想起される。

4楽章：Allegro vivacissimo - Allegro maestoso assai

2分の2拍子。ヴァイオリンにより、快活だが荒々しい主題が演奏される。その後、オーボエによる活気あるメロディーが登場する。荒々しく展開され頂点に達すると、潮が引くように徐々に落ち着いた雰囲気に変わる。静けさが極限に達したタイミングで、8分の6拍子に変わり、雄大なメロディーが現れる。これは第1楽章の序奏の派生で、これを最終盤に持ってくる事で4つの楽章を1つの全体にまとめる手法が取られている。

近藤 圭